

時間や負担の軽減につながってほしい」と期待を込めた。

販売価格は1台約2700万円（設置費込み）。コーンズ社は年間販売目標を200台としている。

◆装着時間が半減 洗浄機能も改良 デラバル

酪農機器メーカーのスウェーデン・デラバルは今夏、昨年の国際農業機械展で発表した次世代搾乳ロボット「VMS V300」の国内販売を開始。7月31日は幕別町で発表会を開いた。

V300は、牛の乳頭の位置確認に3Dカメラを採用、搾乳カップの装着時間が現行機の半分になった。搾乳時間も大幅に短縮、同社は「1頭で1分程度短縮される。1日で2、3時間になり、1台で搾れる能力が上がった」とする。乳頭を洗浄する機能も改良し、機械の操作やデータ管理はモバイル端末からもできるようになっている。

同社の搾乳ロボットは、人が行う手順を機械に置き換えた動作が特徴。導入費用は周辺機器も含めて2500万～3000万円で、単年度で100台の販売を目指す。

国内販売を担う同社の日本法人（東京）の新谷聡専務は「酪農の雇用問題は世界的な課題で、搾乳の自動化は避けられない。製造からメンテナンスまで、お客さまに近い立場で課題解決に役に立ちたい」と話していた。



幕別で発表会が開かれたデラバルの搾乳ロボット

4Kカメラ 牛を管理 上士幌で5G試験 総務省事業

2019年8月29日

国際電気通信基礎技術研究所（京都、ATR）とKDDIなどは11月末にも、とちぎ村上牧場（町上士幌東3線、村上靖代表）で、第5世代移動通信システム（5G）を酪農の現場で利用する実証試験を開始する。高精細（4K）カメラを牛舎内に配備、耳標（家畜識別用の耳に付ける標識）から乳牛の場所を把握し、作業の効率化・省力化を図る。



試験的に取り付けられたカメラ

総務省の5G総合実証試験のうち、屋内でも端末からの超高速通信を可能にする技術条件の調査検討を、ATRが受託。KDDI、早稲田大学（電波伝搬シミュレーション）、宮崎大学（画像解析）、上士幌町、同牧場が協力する。

ATRは上士幌のほか、日高管内新冠町で競走馬育成モニター、大阪市でスポーツ観戦への応用についても調査する。費用は3件合わせて1億9700万円。

上士幌では牧場敷地内に基地局1基、牛舎内に19～25台のカメラを配備。牛が餌を食べているときに撮影した画像データをサーバーに送り、画像解析して耳標を認識、牛の居場所をスマートフォンやタブレットに示す。

村上牧場は親牛を約600頭飼育。週1回程度の牛の繁殖検診で、20～30頭程度を診察するが、対象の牛を探すのに15～20分を要していた。牧場副代表の村上智也さん（35）は「酪農の現場も人手不足が顕著。ITを組み合わせることで、何百頭もの牛の管理を効率的にできるようになる」と期待する。

ATRの吉田享広さんは「画像データを蓄積すれば牛の行動分析が可能になり、体調管理にも応用できる」と話している。

<第5世代移動通信システム（5G）>

高速・大容量化、超多数端末接続、超低遅延を可能にする無線通信システム。